

## 第4章 求められる情報教育と情報モラル教育

### 第3節 子どもたちに今求められる情報活用能力と指導計画

新情報教育の手引きによると小学校段階での情報教育について、次のように書かれている。

以下、情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～平成14年6月 文部科学省より引用

小学校では、特定の教科は設けられていないが、「総合的な学習の時間」をはじめ各教科等の様々な時間でコンピュータや情報通信ネットワークを適切に活用することを通じて、コンピュータや情報通信ネットワークに慣れ親しませることとしている。このため、小学校段階では、「情報活用の実践力」の育成に焦点を当てて、情報手段に慣れ、親しませつつ、その適切な活用体験を持たせることが大切である。

クラス担任制の小学校では、各教科間の関連を図った取り組みが行われやすいという特色を生かし、児童の発達段階に合わせた、具体的、体験的活動の中で「情報活用の実践力」の育成を図ることを基本としながら、基本的な機器の操作やモラルを習得させたり、将来の「情報の科学的な理解」及び「情報社会に参画する態度」の獲得に役立つ豊かな経験を積ませることが必要である。

小学校学習指導要領総則の中の、「情報手段に慣れ親しみ、適切に活用する学習活動を充実する」という記述は、情報教育の実施を求めたものであり、「視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図る」という記述は、視聴覚教育をより発展させた教育の情報化を求めたものである。後者と同様の記述は、平成元年告示の学習指導要領にもあるが、前者の記述は今回の学習指導要領で新たに盛り込まれた。このことにより、小学校段階での情報教育は、今回の学習指導要領において充実が図られているといえる。小学校段階における情報教育では、特に、以下の点に留意することが必要である。

#### 引用ここまで

小学校における情報教育では、「情報活用の実践力」の焦点を当てると示されている。もちろんこの記述の前に、基本的なコンピュータの操作方法（電源の入れ方、切り方、マウスやキーボードの使い方、プログラムの立ち上げ方、WINDOWSの基本操作など）、利用するアプリケーションの使い方、コンピュータ室の使い方などの学習も含まれることは言うまでもない。

その上で、情報活用の実践力、つまり、コンピュータなどを使って、自らの課題を解決するために積極的に調べ、それをまとめ、さらに、発表していくこと力をつけさせていくことである。

さて、ここで、現場の実態を鑑みながら情報教育の推進をいかに進めるかについて論じていく。

教育活動の全ては教育計画に則り、その学校の教員によって推進される。教科は、教科書がある。教科書が終われば、指導が終わったと言うことができる。(ちょっと危険な言い方かもしれないが。)ところが、現指導要領で新たに設けられた総合的な学習は、いままでの教科とは違う。まず、教科書がない。そして教える具体的な内容は各学校で定めることになっている。その中に情報教育の必要性が掲げられている。

ここで、考えていかなければならないのは、それぞれの学校で総合的な学習がどれだけ、きちんと計画され、きちんと実施されているか、今一度点検してみなければならぬ。教科でも道徳でも、特別活動でもないものを総合的な学習の時間にしていないだろうか。時間はやっけても、内容が伴っているだろうか。そういう本校においても、総合的な学習に関する発表会があり、それに向けて、がんばらなきゃというようなところはある。

さて、情報教育についてはどうか。本校の先生方は、比較的積極的にコンピュータを使っていると思う。筆者もそれぞれの先生に、「この教科でこんな資料があるよ。」「こんな教材、おもしろいんじゃない。」などと声をかけているのも多少は効を奏しているかもしれない。また、コンピュータの授業には、呼ばれても、呼ばれなくても、ニコッとしながらコンピュータ室に入って行く。子どもたちの操作技能は、基本はあるがバラバラだ。行けば必ず仕事があって、あとから、「佐々木先生、来てくれてありがとう。」と言われる。小学校では、クラス担任が全ての授業を行うことがほとんどである。そういう面では、各教科の関連性は図りやすいだろう。しかしながら、コンピュータを使う先生、使わない先生がはっきりしてくるといっても現状ではないか。だから、筆者がパソコンの授業に積極的に顔を出すようにティームティーチングなどを取り入れ、どのクラスも機器の利用にできるだけ格差が生じないようにすることも大切であろう。

本章で、情報活用能力の3つの柱が盛り込まれた各学年の指導目標を出した。総合的な学習の時間の中で、情報教育に関わる時間は非常に限られている。だからこそ、その一時間一時間の指導は大切にしてほしい。特に今回の論文で扱ったような、情報社会に参画する態度、とりわけ情報モラルについては、丁寧に扱ってほしいと思う。

また、情報活用能力の実践については、広く学校教育活動全ての中で、コンピュータの利用だけにこだわらないが、身の回りの、また、図書、新聞、調査などの情報を集め、それに基づいて自分の考えを整理し、課題を解決する力をつけてほしい。その中で、とりわけコンピュータは、情報を収集する能力については、非常に長けている。教科に活用できる生の情報もいっぱいである。また、子どもたちも目を輝かせて授業に食いついてくる。このすばらしい情報機器を積極的に使ってほしいと思う。

さて、手引きにもあるが、小学校で気をつけておかなければならないことがある。それは、小学校の1年生と6年生では、発達段階が大きく異なることである。小学校の低学年では、お絵かきや学習ゲームみたいに簡単な操作でできることをして、コンピュータが楽

しいものであることを気づかせたい。中学年になって、インターネットの検索や発表のまとめなどに使っていく。この段階では、一人一台使わせるよりもむしろ、グループに一台という利用形態にし、みんなの知恵をあわせながら、馴れていくということを進めたい。高学年になると、コンピュータは一人一台当たればいいだろう。また、何でもインターネットというのではなく、図書館へいくグループ、インタビューするグループ、そしてインターネットを使うグループと、数ある情報収集の方法の中の一つという位置づけにしていきたい。

以上考察してきたように、小学校における情報教育は、情報活用能力が中心となる。言い換えれば、コンピュータを授業にどんどん取り入れ、子どもたちがパソコンに慣れ親しみ、積極的に使おうという意識と技能を育てることが大切である。その一方で、情報モラルについても、意図的に授業に取り入れ、実践していくことが強く求められる。